

「全国高校生体験活動顕彰制度 地域探究プログラム」報告

令和3年3月3日（水）

【目的・趣旨／概要】

本事業は、高校生が体験活動を通じた成長を促し、改訂された学習指導要領のキーワードである「探究」の手法を用いて学びを深めることや、取組みを段階的に分け、効果的な学びの手法が修得できるよう構成されている。特に、地域での実践活動では、多様な人々と協働しながら地域・社会にある課題解決に向けた取組を行うことで、郷土や自然に愛着をもち、新たな価値を創造する高校生の育成を目的としている。全体を通して、探究の手法を用いながら、「個人の興味関心と地域の魅力・課題を結びつける力（探究力）」を実践的に身に着けることを目的としている。

【参加者】

・ 福島県立光南高等学校 文理・理科コース 19 名

【協力者】

〈業務運営全般〉

・ 一般社団法人 未来の準備室 理事長 青砥 和希
・ 同上 理事 湯澤 魁

〈各プログラム講師〉

・ 矢吹町役場産業振興課 主 事 鈴木 徳人
・ 矢吹町地域おこし協力隊 飯塚 智孝

〈オリエンテーション合宿・日帰り 講師〉

・ にしごう体験隊 会 長 上田 秀人
・ 同隊員 須賀 幸子
・ 同隊員 黒田 美智子
・ 同隊員 高橋 宏明
・ 同隊員 三村 正
・ 同隊員 黒田 耕秀
・ 同隊員 松崎 友子

〈各プログラム 学生サポーター〉

・ 福島大学 4 年 佐藤 雅哉
・ 福島大学 4 年 鈴木 理久
・ 福島大学 4 年 鈴木 彩乃
・ 福島大学 3 年 仁井田 裕陽
・ 福島大学 1 年 岡部 百華
・ 福島大学 2 年 菅野 菜緒
・ 日本大学 2 年 平井 涼雅



【運営総括】

新型コロナウイルス感染拡大を受け、政府は4月8日、改訂新型インフルエンザ等対策特別処置法に基づく「緊急事態宣言」を令和2年4月7日から5月6日までの1か月を期間として発表。（令和2年4月8日政府による「緊急事態宣言」を受けての対応について）さらに4月16日、新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく「緊急事態宣言」の対象地域を全ての都道府県に拡大することが決定された。これを受け福島県では、翌4月17日に県民に対して不要不急の外出の自粛等の願による「緊急事態宣言」を発表した。連携先である光南高校は20日、翌21日からゴールデンウィーク明けの5月6日まで臨時休業とし、一切の授業を停止した。

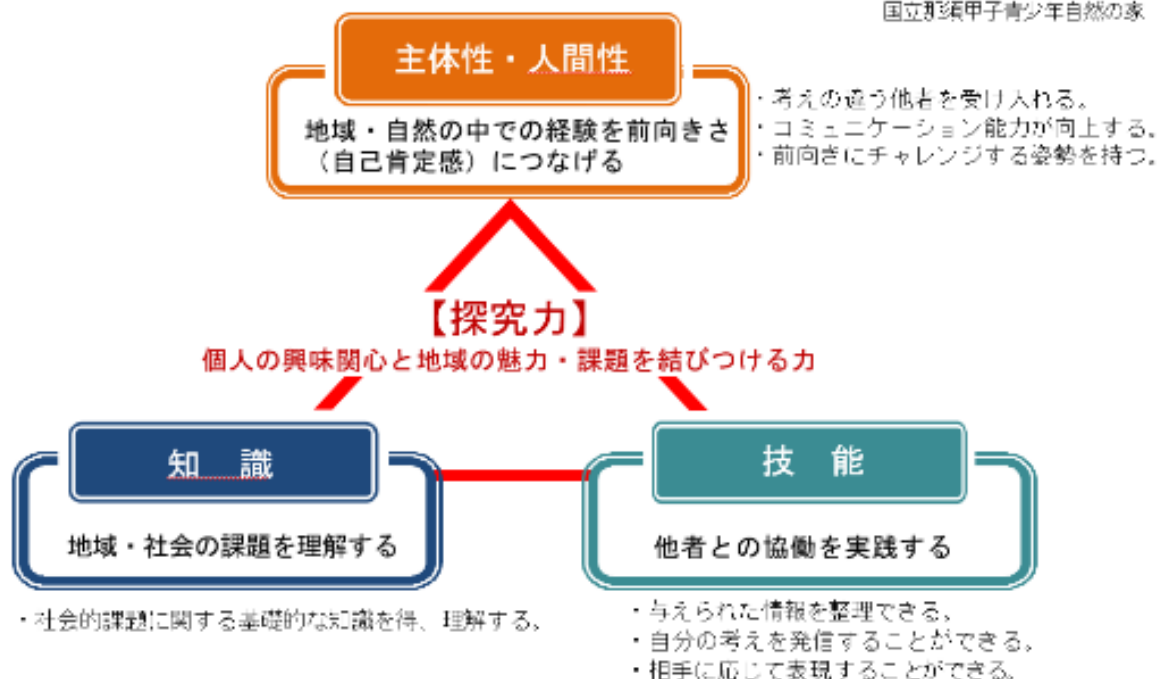
それに伴い、年度当初よりオリエンテーション合宿や事業カリキュラム等の授業計画を詰めていた内容が白紙となったほか、職員が学校に出向いたり、講師や運営関係者と打合せをしたりする機会が制限される事態となった。

そのような状況下の中、運営関係者が遠隔的に打合せや情報共有する機会がとれる手段として効率的かつ機能的にコミュニケーションがとれるアプリ「Slack」をツールとして運営陣で共有し、チャットやファイルの共有を行ったほか、オンラインでの打合せを有効にした。

また、学校からの要望でオリエンテーション合宿を日帰りにしたり、高校独自では行うことが不可能になったフィールドワークをオリエンテーション時に実施したりすることで、生徒と世相の実態に添った事業運営を務めた。さらに、地域理解を深めるためのフィールドワークの代案として、県内の大学生を学生サポーターとし召喚。生徒の地域探究の支援アドバイザーとして、運営陣として参画した。

【光南高校×自然の家】地域探究プログラムでめざす高校生像（案）

令和2年4月18日（月）
国立形須甲子青少年自然の家



【プログラム概要】

NO.1【ガイダンス】 4月15日

通常の授業時に実施。蓮見次長、矢内・海野の両企画指導専門職が学校に出向き、KP法を用いて、「地域探究プログラム」の趣旨や地域課題についての取り組み方を説明した。

NO.2【講話等「地域づくりの実践」】 5月21日、6月10日

一般社団法人未来の準備室理事長の青砥和希氏を講師に、「地域づくりの実践」の内容で講話を実施。5月21日は“光南高校探究授業・探究と調べ方について”というテーマで、オンデマンド配信で授業を行った。

担任の久住氏と青砥氏とで打合せを重ねた結果、これまでコロナ禍で休校が続いたことや、今後もフィールドワークや他者との交流に困難を要することが予想されることから、生徒各自の進学も含めたキャリアの視点(will)、課題研究と称し設定したテーマの視点(can)、さらに、地域ニーズの視点(needs)と3つの視点の解説を交えて、生徒各自が探究活動の調べ学習を進めることができるように提唱した。

青砥氏がこれまで福島県立ふたば未来学園高等学校で生徒に探究活動の支援を行った経験から、“will・can・needs”の視点に添った課題として、①新型コロナウイルス感染症によって、その職業(分野)ではどのような影響を受けているか、②その職業(分野)ではどのような対策が必要な状況になっているか、③その職業(分野)に就こうとしている皆さんが、現在の高校生の立場でできることは何か、の3つを出題。生徒各自が、コロナ禍で、インターネット等で調べ学習を進める際のポリシーや課題調査のためのシート(マインドマップ、はちのすノート、マンダラートから選択)の記入の仕方について解説を行った。

⇒オンデマンド配信動画 <https://youtu.be/o9mtbfgU4Q4> (※限定公開 URL)

6月10日は、始めに青砥氏が生徒に「高校生びいきのカフェができるまで」という題材で講話を実施。青砥氏は、EMANONを創設するきっかけや、中心市街地で空き家を活用しカフェをつくるアイデアについて説明した。次に、おおよそ各生徒3人に運営側から1人が付き、「自分の現在のテーマ(問題)は?」「他のクラスメイト/大人に聞かれて、気がついたwillは?」「他のクラスメイト/大人と話をし、気がついたneedsは?」「needsとwillをつなぐ、問い(課題)はなんだろう。」という設問を手掛かりに、生徒各自が抱く進路や仕事等のキャリアと地域課題とのつながりについて思考をめぐらした。

NO.3 フィールドワーク①【講話等「地域の魅力を発見」】 6月24日

矢吹町役場産業振興課主事鈴木徳人氏と矢吹町地域おこし協力隊飯塚智崇氏を講師に招き、「持続可能な開発目標(SDGs)で世界との繋がりを持つ特色ある町へ」というテーマで授業を実施した。

鈴木氏が「あるものを活かす」「ないものをつくる」という題で講義を行った後、それを受けて飯塚氏とともに生徒は「駅前に居場所をつくるとしたら」という内容でワークショップを取組んだ。

また、両氏は、矢吹町が特色ある町づくりとして目標に据える“SDGsをどのように地域課題に結び付けていくか”という議題を生徒に講じながら、今後の町づくりの展望と生徒各自の地域探究の課題を共有した。



(1) 地域理解をより深める。

- ・グループ協議において、フィールドワーク①で得た個の気づきや発見を共有する。
- ・フィールドワーク①を踏まえ、体験により得た知識や技能と既存の知識や技能を関連付け、フィールドワーク先の活動目的は何かを考える。
- ・フィールドワーク先の活動においてどんな人たちと協力していたか、どんなつながり（ネットワーク）を作って活動していたかを整理する。

※ガイダンス時に共有した「参加者の興味・関心事項や個性など」を活かして考えられるよう留意する。

「運営に関するガイドライン」 より

上記、ガイドラインのフィールドワークの実施が、コロナ禍により困難な状況となった。そのため、担任をはじめ運営側で、校内で行える探究活動の支援方法を模索した。その結果、地域の実践活動やボランティア経験のある県内の大学生をサポーターとして高校に帯同し、生徒のもつ地域課題へのアドバイザーとして支援できる形式をとった。

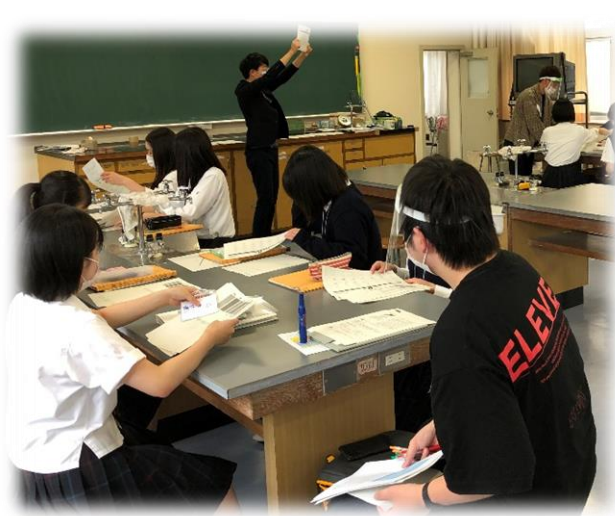
7月15日は、矢内・海野の両企画指導専門職が学校に出向き、生徒の地域課題についての理解を深める見通しの持ち方や、“will・can・needs”の各視点について確認。

また、次時の授業に大学生の学生サポーターが来校し、各自の地域課題についての助言と支援をすることを予告した。

7月29日は、地域理解をより深めるための学生サポーターを交えた授業支援を実施。

生徒を大まかな課題ごとの5つのグループに分け、それぞれに学生サポーターを担当として配置した。これまで、インターネットで調べ学習を進めていた生徒は、各自の課題について学生サポーターへ相談したり、アドバイスを受けていたりして、自身の地域課題を深掘りした。

一方、学生サポーターは、自身のこれまでの学習経験値を活かしながら、生徒の地域課題について助言。また、学生サポーターは、生徒のキャリア(will)や社会的ニーズ(needs)と照らし合わせながら、地域課題の解決策について具体的なアドバイスをおくった。



西郷村川谷地区をフィールドに、『川谷開拓を発見「川谷の未来拓き」～川谷の魅力を開拓しよう！～』をテーマにした日帰りでのオリエンテーションを実施。光南高校地域探究プログラム参加生徒19名中、10名が参加した。

10名の参加生徒をそれぞれ「ドライフラワーと甘酒」をテーマとする3人をA班、「オリオン座のベテルギウスについて」をテーマとする3人をB班、「着色料について、建築、薬草、菌」をテーマとする3人C班と、大きく3つの班に振り分けた。

運営サポートとして、にしごう体験隊の上田秀人会長をはじめ5名の隊員を川谷地区案内人として協力を仰いだ。また、学生サポーターとして、福島大学から4年の佐藤雅也と鈴木彩乃、3年の菅野菜緒、光南高校OGであり1年の岡部百華、日本大学工学部2年の平井涼雅をそれぞれ青砥氏から紹介を受け協力をお願いした。他に、矢吹町地域おこし協力隊の飯塚智崇氏を引き続きサポーターとして協力を依頼した。

参加生徒の3つの班にそれぞれのサポーターを均等に振り分けた他、蓮見次長、海野企画指導専門職、青砥氏、久住氏をそれぞれの班の支援者として配置した。

川谷報徳地区集落センターを間借りし、まず初めに「川谷開拓の歴史と今」というお題で上田会長と蓮見次長によるオープニングスライド&トークを行い、参加生徒へ川谷地区の開拓の歴史について講話した。次に、オリエンテーションのねらいである3つの目標①光南高校3年生の視点から、川谷地区の魅力を見つめ開拓する②川谷住民との対話から、自分たちが川谷地区のためにできることは何かを思考する③“川谷の人やまち”のために、自分たちのアクションプランを提案する、を矢内が説明し、心構えとして“若者の視点で川谷の魅力を開拓し、若い眼差しで川谷や地域の未来を拓く切り口を発見する！”ことを共有した。

生徒は班に分かれ各班のサポーターとともに、海野企画指導専門職によるアイスブレイクで互いの興味関心を打ち解けた後、フィールドワークに向かった。

フィールドワークでは、セッション1として川谷地区歩きを実施。各班のサポーターとして帯同した、にしごう体験隊の隊員の案内により、川谷地区の開拓を示す石碑から上田会長の一部畑を切り拓いて作成しているトウモロコシ畑の迷路や特産品として生産しているかすみ草など、川谷地区の過去から現在に至るまでの、歴史・産業・農作物といった視点に沿ったポイントを直接観察し、聞き取りを行ったり、タブレットで写真を撮ったりしながら巡検した。

昼食を挿んで、生徒は、にしごう体験隊のクラフト体験活動である、かすみ草を使用した「ハーバリウムづくり」を実施。かすみ草の第二次生産についての私見を深めた。

その後セッション2として、班ごとに「決定！川谷の魅力ベスト〇」というテーマに沿って巡検し、印象深い内容の撮影したものを紹介発表した。

川谷地区のフィールドワークで、学びのサイクルを一巡したことを踏まえ、残りの時間を青砥氏が運営するコミュニティ・カフェ EMANON に移し、白河のまちなかで各自のテーマに沿ったフィールドワークが展開できるよう、学生サポーターとともに生徒の支援を行った。

セッション3を「自分のテーマを深掘り、白河まち歩き」とし、生徒たちは、学生サポーターと意見交流をしたりサポーターと共に最寄りの商業施設を訪問したりして実践活動のヒントとなる術を模索した。



その後、セッション4として全体で「フィールドワーク報告会」を行い、セッション3での収穫や今後の活動見通しについて共有した。

EMANON を活動の拠点とすることで、図書館へのアクセスやテーマの参考となる商店街などに近く、コロナ禍によりこれまで実践活動がままならなかった中、数時間のセッションであったが数々のフィールドワークを展開した様子を鑑みると、非常に有意義な手段となった。

また、学生サポーターを支援者として継続して帯同することで、生徒との信頼関係が築き易くなったり、個人のテーマにより深く傾聴して対応したりと、有効な結果が見て取れることができた。

【補足】

オリエンテーション合宿が日帰りになったことで、同合宿で実施すべき他のプログラムについては、後日、授業時間に職員が来校し補講を行った。



【東北地方ステージ 東北ブロック】12月24日

実践活動についての発表を通して、まとめる力や表現力を養うとともに、他者の発表や自身の発表への講評を聞くことで、新たな気づきや学びの機会とする「東北地方ステージ in 国立岩手山青少年交流の家」が12月24日に開催。クラウドコンピューティングを利用した Web 会議サービス“Zoom”を使用し、主会場とオンラインで接続し実施した。

ブロック全体では、個人部門で那須甲子からの出場1名、グループ部門で岩手山青少年交流の家から4組が出場。那須甲子代表として個人部門で出場した、光南高校3年の酒井美緒さんが「ドライフラワーが魅力的なワケ～仕事の在り方とドライフラワーが伝える本当のメッセージ～」と題した報告書の内容を、さらにパワーポイントの提示資料にまとめ直し発表を行った。

個人部門で、優秀賞を受賞し全国ステージ出場を決めた。



【全国ステージ】令和3年2月14日

地域探究プログラムは、宿泊を伴うオリエンテーション合宿を通して、ものごとを探究する姿勢、主体的に取り組む態度、課題に向き合う力などを身に付けた。また、地域での実践活動においては、多様な人々と協働しながら地域・社会にある課題解決に向けた取組を行うことで、郷土や自然に愛着を持ち、新たな価値を創造する高校生の育成を目的とした。また、体験活動を積極的に行った高校生を学校や社会がしっかりと評価するよう、その機運を高めることに資することとし、主催国立青少年教育振興機構、後援文部科学省の下、2月14日に全国ステージが実施された。

コロナ禍の折、感染症対策として本部と出場施設とを Zoom を使用し、オンラインで接続したほか、出場者の発表も透明アクリル板を使用したり、距離をとったりして行った。

個人部門で、青少年機構理事長賞を受賞した。



【企画・運営上工夫したこと】

- ・新型コロナウイルス感染拡大防止のため、福島県内の公立高等学校が4/21～5/6まで臨時休業となった。そのため、光南高校への打合や生徒への学習支援、フィールドワーク等が困難となった。
- ・コロナ禍により、プログラム変更を余儀なくされたが、運営陣でその都度、リ・デザインを行った。
- ・8月実施の日帰りオリエンテーションでは、熱中症対策の工夫が必要となった。

【成果】

- ・感染拡大防止対策や関係各位の時間制約も含め、事業当初から担当教諭や講師等との打合せに苦慮した。コミュニケーションツールアプリ「Slack」を運営手段として用いることで、メールより手軽で素早く、情報共有手段として非常に有効であった。また、生徒への情報提供のツールとしても活用することができた。
- ・これまで市内他校でも総合的な探究の時間の講師として実践のある、一般社団法人未来の準備室理事長青砥和希氏をアドバイザーとして迎え入れ、共同で事業運営を行ったことで手立てに対する助言や効果的な進め方についての助言を受けた。

【課題と方策】

- ・対象生徒が3年生であると、探究の報告書作成の時期である9月～10月に推薦入試や企業等の面接の日程と重なることになる。ゆえに、対象学年は1・2年生が好ましい。

国立那須甲子青少年自然の家 [作成]：矢内 淳仁